











以前から目を付けていた、美少女、深沢美和を襲おうと、自宅を訪れた男。そこで、思わぬ事態に遭遇する。それは、玄関に姿を現した、美和の母、雛だった。おしとやかで、大人の魅力溢れる、お嬢様風の美女。これなら一瞬で自由を奪える、と思うだレイブ魔の男。しかし。

「……あなたは何者ですか。娘に何用で？」

その、隙の無い雰囲気。相手を射抜くような目。そして、意外な素早さ。雛は、人畜無害な人妻などでは無かった。この屋敷の、空手道場の師範代なのである。

「アンタに惚れたぜ。何が何でも、モノにしたくなって来た」

「……………。お好きなように、私も、手加減出来ませんわ、きっと」

男に、危険なものを感じた雛。かつて、学生時代、不良生徒20人を一人で蹴散らした、その実力。それを、20年振りに発揮する時が来たのだ。雛を力づくでモノにしようとする輩は、過去も現在も、後を絶たなかった。

雛は、その師範代クラスの力で、男に応戦する。しかし、男は戦場で、軍人を何人も殺し、レイブした殺人鬼。とても敵う相手では無かった。

「……や、やめ……、ぐえっ！！」

マウントを取られ、一瞬で首を締め上げられる。男の怪力で、首の骨が、粉々に砕けた。ぐきん！という音と共に、白目を剥き、全身をびくんと痙攣させる雛。完全に即死だった。

「まったく、可愛い顔して、恐ろしい女だ……こんなの、シールズのビアンカ中佐以来だぜ……！」

男は、断末魔の痙攣を繰り返す雛の衣服を、破り始めた。既に、勃起していた。

「はあ……はあ……ヒナさん……、可愛い……！  
このエロいオッパイ……！ホントにアラフォーかよ、  
このエロマンが……っ！」

男は、雛を玄関先で、裸に剥いた。会ったばかりの男に、  
衣服を引き裂かれ、裸を見せられている。しかし、一切の  
抵抗をしない雛。もう死んでいるのだから、当然だった。

「ああ……気持ちいい……！まだまだ現役だな、  
ヒナさん……！この柔らかいマンコ……つい最近も  
ダンナとチンポしたんだろ？なあ……！このエロい  
オッパイ見せて、パパのポッキチンポペろペろ  
舐めまくったんだろ？まったく、大人しそうな顔して、  
とんだエロ女だぜ……！娘が見たら、どう思うだろうな」

唇を重ね、舌を入れながら、乳房をむにゅむにゅと  
揉みしだく男。ペニスは限界まで勃起し、雛の子宮を  
ガンガン突きまわっている。ちなみに、雛が夫以外の  
男とセックスするのは、これが初めてだった。

ちゅっ……

ちゅば、ちゅっ……

むにゅっ……、むにゅ……

ぎゅっ、ぷにゅ……！

れろれろ……ちゅっ……

「ああ……可愛い……！こんな40歳の女、そうはいねーぜ……！  
オッパイぷるんぷるんじゃねーかよ……！どっかのバカとは偉い  
違いだぜ……！ああいく！いく！ヒナさんイクッ！チンポから  
精子出すぜっ！美和ちゃんのお母さん！ああっ！あっ！！」

びゅるっ！！びゅっ！！びゅっ……！！

男は、雛の冷たくなり始めた身体に、容赦無く興奮し、射精した。死体へのレイプなど、  
戦場帰りの男にとっては、ただの日常だった。

「ほら、オッパイ揉んでるぜヒナさん……！  
エロいオッパイ……！40歳でこれはすげーぜ……！  
超ポッキする……！！」

「さすがはまだセックスしている女だな。  
腋毛も一切無い、綺麗な裸だぜ。腋毛  
生やして男の前に現れるキ○ガイ女とは  
訳が違うぜ……！！」

何度射精しても、萎えない  
男のペニス。男は、死体に  
興奮する性格だった。  
ネクロフィリアの、殺人鬼  
なのである。

むにゅっ、むにゅっ！  
ぷるっ、ぷるんっ！

雛の、一児の母とは思えない、弾力溢れる  
乳房。夫と、未だに  
夜の生活がある雛。  
その美貌は、しっかりと  
維持されていた。

雛の死体を、容赦  
無く犯す男。その、  
無抵抗な美貌人妻の  
裸体。揺れ動く乳房。  
男は、何度も何度も  
射精しまくる。雛は、  
白目を剥き、舌を  
突き出して、絶命した  
ままの表情。自分を  
殺した男に、犯されて  
いる事も、もう理解  
出来ていなかった。  
完全に、死んでいる  
のだから、意識など  
ある筈が無かった。

「娘のオッパイも、これから見せてもらうぜ。  
結構デカいぜ、きっと。ヒナさんの娘だからな」

男は、雛の死体を何度もレイプしながら、娘の帰りを待った。

何度も何度も、飽きる事無く勃起し、雛の身体を犯す男。元々の、ネクロフィリアに加え、雛の淫らな熟女ボディである。異常者の男は、何度でも勃起し、尽きる事の無い射精を繰り返した。

「ったく、何て女だ……！その辺のヤ○ザよりも喧嘩強い癖に……！子持ちの母親なんだからな、このエロい身体で……！」

相手が、強ければ強いほど、犯した時の興奮が増す男。今までも、何人もの強い女を、殺し、犯して来た。生粋の殺人鬼だった。

「すっげーエロいオッパイだぜ……！このオッパイで美和ちゃんを育てて来たんだろ？そして今は母乳出ない代わりに、お父さんにオッパイしゃぶらせて、ぺろぺろさせながらセックスしてんだろ？綺麗な形のいいオッパイは、セックスには必須だからな、オッパイ醜い女は、男にこうやってボッキすらして貰えないんだぜ、誰とは言わねーけどな……！」

パンッ！パンッ！パンッ！  
パンッ

ぶるんっ！ぶるっ！  
ぶるっ！ぶるっ！たぶん！  
たぶっ！たぶっ！たぶっ！

男は、何人もの女を殺し、犯して来たが、身体が醜い女は、服は着せたまま犯した。醜い乳房など、殺人鬼の男ですら、見たくも無いのである。

「40なのに、このぶるんぶるんのエロオッパイはすげーぜ……！25でも垂れた最悪のオッパイもあるってのによ……！ああボッキする……！」

男は、雛の胸の上で、優雅に形を変えながら揺れまくる乳房を眺めつつ、更に勃起していく。

「あーいくぜっ！！またイクぜ！ヒナさんっ！そのエロい身体にビュって精子出すぜ！ああいくっ！可愛い！美人のエロマダムに中出しするぜ！ああオッパイ！オッパイエロい！40歳のエロい美乳見ながら射精するぜ！ああ！死んだ女の冷たいオッパイ興奮するっ！！ああ！あ——っ！！！」

異常者の男は、死体となった雛の美しい身体を見ながら、絶頂に達した。

仰向けの姿勢に飽きたのか、雛の身体をロープで吊るし上げる男。  
そのまま、犯したり、オナニーをして、精子を掛けたりする。

「可愛い……！  
可愛いヒナさんっ！  
ああっ！出るっ！！」

びゅるっ！！びゅっ！！  
何回射精しても、果てる事無く  
勃起し、精液を吐き出す。  
異常者の男は、性欲も無限  
だった。

「可愛過ぎるぜ、ヒナさん……！  
ホントに40なのか？こんなエロい  
40歳の女居ないぜ……！ああ……  
まだボッキする……！」

身体を起こした状態の、雛の死体。  
美しい形の乳房が、重力に引かれ、  
最高の形を見せる。

「あーエロい、ヒナさんの熟女オッパイ  
すげーエロ。若い女には無いエロスを  
感じるぜ……！まあ、ただ垂れただけの  
バカ女の萎えるオッパイは見たくもねー  
けどな。ヒナさんは40なのに最高に  
エロいオッパイだぜ……！流石は未だに  
ダンナとセックスしてるだけの事はあるぜ。  
ああ……またいく、またいくぜ！ほら！  
ダンナのザーメン浴び慣れてるんだろ？  
たまには別の男のザーメンオッパイに  
浴びな！ああっ！！」

男は、物言わぬ冷たくなった  
雛の死体に、徹底的に精液を  
浴びせ掛けていった。



深沢家は、地元では割と有名な名家。それなりに、大きな屋敷なので、浴室も豪華だった。広過ぎる湯船に、少し寂しさを感じている美和。するとそこに、母親である雛が入って来た。

「美和さん。私も御一緒してもよろしくて？」

「……は、構いませんが」

母親と、一緒に入浴するのは、もう数年振りだ。女としての、身体になり始めてからは、恥じらいを覚え、両親との入浴は、控えるようになった。たまに、飼い犬の与太郎と一緒に入るくらいである。

『……少し照れ臭いな。同じ女なのだから、恥ずかしがる事も無いのだが…』

流石に、母親を前に、身体を隠すのも変だ。最近、もっと恥ずかしい経験をしているので、それに比べれば、平気なのだが。

二人は、いつものように、穏やかな交流を持つ。おしとやかな母と、生真面目な娘。声を荒げる事も無く、二人の愛に溢れた会話は、心温まるものだった。

「……ふう、のぼせてしまったわ、……もう年ね」

そう言って、湯船から立ち上がる雛。その恐るべきプロポーションを目の当たりにし、眩暈がする美和。最近、自分も体型に気を遣うようになったので、よく分かる。雛は、凄まじい美女なのだ。

『…ちょっと待て、40歳とは、こんなに美しいものなのか……？母上は何だ、魔女が何か？』

美和は、母のその、年齢を感じさせない、美しい裸体に、戦慄すら覚える。自分はまだまだ、子供なのだと実感する。グラビアアイドル級のスタイルを持つ美和ですら、その美しさには、嫉妬してしまいそうだった。

「…美和さん。あなた最近……綺麗になったわね。…恋でもしているのかしら？」

「……は」

突然飛んで来た矢に、純情な美和は赤面する。

「隠さなくても良いのよ、女は、恋をすると、その分綺麗になるの。それはちっとも、恥ずかしい事では無いのだから」

雛は、『自分は今でもそうとでも言わんばかりに、優しく微笑む。

『…うむ。母上には敵わないな。流石は人生の先輩だ』

美和は、目の前に居る美女が、自分の母親である事が、誇らしかった。自分も、この母の血を引いているのなら、きっと大好きな彼のために、綺麗になれると思った。同時に、自分の両親が、最近の自分のように、愛しい相手と、淫らな行為をして、愛を確かめ合っているのだ、と思い、それを想像して、恥ずかしさを感じるのだった。